

# 「国際化」に向けて舵を切ったイランの大学

桜井 啓子

早稲田大学国際学術院教授・イスラーム地域研究機構長

## 1. 国際化に向けた取り組み

欧米の文化的影響を警戒し、国際社会との交流に積極的ではなかったイランが、高等教育の国際化に向けて大きく舵を切った。それを可能にしたのは、5プラス1(国連安保理常任理事国の露中米英仏と独)とイランとの間で結ばれた核合意(2015年7月)とそれに伴う制裁解除(2016年1月)である。

欧州は、8千万の人口を擁するイランの国際社会への復帰を歓迎し、イランとのビジネス拡大に乗り出している。日本企業も駐在員を増員する傾向にある。しかし、トランプ政権下のアメリカは、オバマ政権時代に結ばれた核合意からの離脱をほめかしているために関係改善には至っていない。

2016年度、イラン科学研究技術省(旧高等教育省)は、大学の国際競争力を強化するために5つの大学と5つの研究機関を選抜し重点的に支援すると発表した。2017年度は、その前段階として、国際化に取り組んでいる23の大学と16の研究所を競わせている。

イランのなかで国際化の先頭を走っているのは、テヘラン大学、シャリーフ工科大学、アミール・キャヴィール大学など、国内屈指の国立大学である。シャリーフ工科大学は2005年に、テヘラン大学は2007年に、ペルシア湾に浮かぶキシュ島に国際キャンパスをそれぞれ開校した。両校の売りは英語による授業である。首都テヘランから遠く離れた南の島が選ばれたのは、同島が自由貿易特区で規制が緩いからだ。2007年にイランの教育政策における最高意思決定機関である文化革命高等評議会が、英語による授業を一部許可する法令を出しているが、対外強硬派のアフマディーネジャード政権時代(2005-2013年)に、

敵性語とみなされてきた英語による授業を推進するのは容易ではなかったことが伺われる。

2010年、同島のテヘラン大学国際キャンパスを訪問した。学生も教師もほぼイラン人だった。国際キャンパスの魅力は、本校よりはいくぶん自由な雰囲気なかで、疑似留学体験ができるといったあたりにあるようだ。だが、テヘランにある本校が原則無償であるのに対して、国際キャンパスは高額の授業料を徴収する。休暇のたびにほとんどの学生が島を離れることから飛行機代だけでも相当な出費になると思われるが、留学に比べれば安いということで、それなりに学生を集めていた。

テヘラン大学やシャリーフ工科大学の事例からもわかるように2000年代から国際化を意識した取り組みが始まっていたが、実施に向けた環境が整いはじめたのは、対外融和を訴えるローハニー政権(2013年-)が誕生してからである。したがって2015年、ローハニー政権で実現した核合意は、国際化を望む大学を勇気づけたことは間違いない。そしてもう一つ、イランの大学を国際化に駆り立てているものとして、国際学術ランキングの存在を指摘したい。一昨年あたりから大学関係者の間で、ランキングを上げるためには国際化にかかわる指標の改善が急務との認識が高まり、留学生の受け入れを強化する大学が増えはじめた。その甲斐もあって国立大学の留学生は、14,000人(2014年)から25,000人(2017年)に増加した。2017年11月の出張では、様々な機会に、日本の大学は、国際学術ランキングの上位100番に何校入っているのか、といった質問を受けた。

## 2. アルザフラー大学と欧州委員会

各大学は国際化のためにどのような取り組みをしているのだろうか。その様子をアルザフラー大学で知ることができた。この大学は、科学研究技術省が国際化に取り組んでいると認めた23校の一つで、一年後の上位5校入りを目指して、教育、研究、ウェブ発信の3つの分野で目標値を設定した。教育分野では、一年間で留学生を2倍、外国人教員を一桁から二桁に、大学院生の海外派遣の推進などの目標が掲げられている。研究分野では、海外ジャーナルへの投稿、海外の研究者との共同研究、国際共著論文などに関する数値目標が並ぶ。訪問した11月26日に、偶然、アルザフラー大学のホールで欧州委員会がHorizon 2020に関するシンポジウムを開催していた。Horizon 2020は、欧州各国が、2014年から2020年の間に約800億ユーロの公的資金をつぎ込んで実施する欧州最大規模の研究開発促進プログラムで、欧州委員会から派遣された専門家たちが、イラン人研究者を対象に助成事業への応募方法などを詳細に説明していた。表立ってイランにコミットできないアメリカとは対照的に、欧州はイランの優秀な人材を積極的に取り込もうとしている。

## 3. 外務省国際関係学院

イランの大学の多くは、科学研究技術省の管轄下にあるが、保健医学教育省は全国の医科大学、石油省は石油工科大学といったように、各省が専門家を養成する大学や大学院を持っている。

11月20日、外務省の管轄下にある国際関係学院を訪ねた。同学院は、外交官や官僚の養成機関だが、7年前に留学生を対象とする現代イラン研究修士課程を開講した。学院長は同学院の国際化の目標について次のように説明した。第一は、イランと留学生の祖国との関係強化。卒業後もイランと良好な関係を保ち、二国間の橋渡し役として活躍している留学生が多いという。第二は、広報外交としての効果。残念ながら国際社会におけるイランのイメージは、イランの実情とはかけ離れ



出典：<http://www.irib.ir/Worldservice/japaneseRADIO/chizu.htm>

ているので、留学生を通じて実際の姿を伝えることが学院の使命である。第三は、留学生や外国人教員を通じた学術交流の活性化。第四は、国際学術ランキングの向上。第五は、大学の財政強化。政府から配分される予算が減っているため、留学生が納入する授業料や国際共同研究を通じた研究資金の確保など、大学自身で収入を得る必要性が高まっている。第六に、学院を海外にアピールすること。第七は、頭脳流出に歯止めをかけること。優秀な学生を国内に留めるためには、イランの大学環境を国際化し、水準を上げることが必須だ。

国際化を通じてイランの将来を担う外交官の育成教育を強化したいという学院長の願いがにじみ出ている。

## 4. イラン比較教育学会第一回国際会議

イランに限らず非英語圏の大学で国際化の先頭を走っているのは、英語による論文発表が主流化しつつある理工学系分野である。一方、母語による論文や書籍が大半を占める人文社会科学系分野は、言語の違いが国際化の最大の障壁となっている。イランは、長らく英語を敵性語とみなしてきたこともあり、理工学系に比べ人文社会科学系の



ホッラマバードの街並



ライトアップされたファラーコル・アフラーク城塞

研究者の英語力が低い。また現政権のイデオロギー政策の影響で、タブーも多く、テーマの選択や論じ方において様々な制約がある。そうした状況にもかかわらず、海外の事例から学びたい、自らも発信したいという願いを持つ研究者たちによってイラン比較教育学会が結成され、この度、第一回国際会議が開催された。会場となったロレスターン大学は、イラン西部ロレスターン州の州都ホッラマバードにある国立大学だ。首都テヘランから各地を結ぶ高速バスで8時間以上かかる。ザグロス山脈の山々に囲まれた風光明媚な地方都市で、町の中心にはサーサーン朝時代の遺跡として有名なファラーコル・アフラーク城塞があり、内部はこの地域に暮らすロル族の文化を紹介した見ごたえのある博物館になっている。

国際空港から離れているため移動に時間がか

かったにもかかわらず、南アフリカ、ナイジェリア、パキスタン、ギリシア、スペイン、アイルランド、リトアニア、カナダ、香港、ベトナム、日本の11か国から参加者を得た。南アフリカからの参加者が9名と最も多く、日本からは筆者を含む2名が参加した。会議初日の午前は、ロレスターン大学学長、科学研究技術省副大臣をはじめ、教育省の役職者や主催者等のスピーチが同時通訳付きで行われた。午後からはじまった研究発表は、英語部会とペルシア語部会に分かれて実施された。これらと並行して教育ワークショップも開催された。ワークショップは、大学の授業に似ており、参加者も自由に質問や意見を述べるが、グループディスカッションを行うような仕組みではなかった。

国際会議とはいえ、やはり言語の壁があり、英



学会ポスター



会場となったロレスターン大学



英語部会の会場



海外からの参加者たち

語部会へのイラン人参加者、外国人参加者のペルシア語部会への参加は限られており、交流という点ではなお課題が残った。しかし、首都から遠い地方都市で国際会議をホストしようと奔走したイランの研究者たちの熱意と努力は敬意に値するものだった。国際会議に際して、専用のウェブページを開設し、レジストレーションや論文の提出をウェブ上で管理し、発表要旨集をCDで配布するなど、様々な工夫が見られた。またイラン比較教育学会は、学会誌を英文で発行することを決定するといった意気込みも見せている。

長く続いた経済制裁のなかで国是となった「抵

抗経済」を掲げる政府は、研究力・技術力の強化を通じた経済的自立や国威発揚のためのランキングの向上を建前に国際化を推進しようとしている。一方、革命以来続いた国際的孤立のなかで、海外との交流が制限されてきた大学教員や学生たちは、国際化を通じて大学に自由な雰囲気を取り込みたいと願っている。イランの国際化が今後どのように進展するのかは、イランを取り巻く国際環境と密接にかかわっている。アメリカが核合意の破棄を強行すれば、人々の願いとは裏腹に大学の国際化は、暗礁に乗り上げることになるだろう。そうならないことを切に願う。



ロール伝統のダンスを披露してくれたロレスタン大学の学生たち  
\*写真はいずれも筆者撮影